信仰と救い

2010年4月29日
佐々木正明
教区教会学校教師研修会
熊本市・希望が丘教会

始めに

　教会学校に関わっている者にとって、自分が救われているということは非常に重要です。絶対必要条件とさえ言えます。またその救いを上手に説明し、自分が取り扱っている人々を救いに導いてあげることも、この上なく大切です。それは、教会学校で奉仕している者の最大の奉仕の一つであり、喜び、また醍醐味とも言えるでしょう。

　ところが、教会学校に関わっている信徒たちの多くに聞くと、自分が救われているという確信はあるし、人に救いを伝えることの重要性も理解しているのだけれど、いざ実際に、言葉で救いを語ろうとすると、とても難しくて、なかなか出来ないというのが本当のところのようです。救いというものを、非常に難しく考えているのではないでしょうか。プロテスタントのクリスチャンですから私たちのほとんどは、「人が救われるのは信仰による」ということぐらいは、心得ています。ただ、その簡単なことを伝えるのが、スプーンでうどんを食べようとするくらい難しいのです。

　そいうわけで、教会学校奉仕者の多くが、せっかくの好機を逃し、喜びを体験できず、醍醐味を知らないままでいるのではないでしょうか。私たちは今日の学びを通して、聖書の教えに固く根ざした信仰と救いの理解を持ち、大胆に、しかもやさしくそれを説明し、人々を救いに導くことが出来るようになりたいと思います。

Ⅰ．　「信仰による救い」を理解しましょう。

　まず、私たちの信じている信仰による救いとは、どのようなものなのか理解することが重要です。

A. プロテスタント信仰の根幹（ルターからパウロへ）

　聖書の数があまりにも少なかったために、多くの信徒を正しく導き養うことが出来なかった、昔のカトリック教会は、実に様々な間違いをくり返していましたが、救いについても決定的な誤りに陥ってしまいました。彼らの理解では、人が救われるためには、神様のみ前に何か善いことをしなければならないのです。短い言葉で言うと、「行いによる救い」だったのです。

神のみ前に善いことをしたら救われる、つまり天国に行くことができるという教えは、色々な弊害を生み出しました。最たるものは、教会がこれを利用して信徒の搾取を行ったことです。1500年頃になると、教会は自分たちの権威の象徴として、贅を尽くした世界最大の教会堂の建設に取り掛かりました。現在、聖ペテロ大寺院と呼ばれて、彼らの総本山となっている建物です。ところがその建築には当初から膨大な費用がかかり、大きな困難が伴いました。そこで考え出されたのは、この大会堂の建築のために献金をすれば、天国に行くことができるだけではなく、煉獄で苦しんでいる家族や親族までが、たちまち天国に行くことが出来るという教えでした。[1]　それで、多くの無知な人々から多額の金を集めて、建築を進めることが出来たのです。

これに倫理的な疑問と怒りをもったのが、マルチン・ルターという修道僧でした。始めのうちこそ、彼の反対は単にこのような金の集め方に対するものでしたが、だんだん金集めの責任者たちとの論争で追いつめられ、ついに、このやり方を認可した教皇の権威にたてつくものとされてしまいます。そこでルターは、教皇の権威に代わり、教皇の権威よりも上の権威として聖書にすがったのです。そして、人が救われるのは行いによるのではなく信仰によるという、聖書に記された使徒パウロの教えを再発見することとなり、この信仰を高々と謳い上げたのです。それが、プロテスタント信仰の始まりであり、根幹です。

B.　パウロの議論（アブラハムの信仰から）

使徒パウロは、「アブラハムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた」という創世記の記述を論拠に、(創 15 : 6)「信仰による義」の神学を打ち立てて行きました。わたしたちの信仰の父であるアブラハムが、神によって義と認められた、つまり救いを受けたのは、何か善い行いをしたからではなく、ただ神を信じたからだと言うのです。

パウロの時代のユダヤ人は、自分たちが神に選ばれた特別な民族であり、この民族だけが神の救いに与かると、固く信じていました。神の祝福を受けたアブラハムの子孫だからです。ところがパウロは、神の救いは分け隔てなく、すべての民族に平等に与えられると論じたのです。それが、信仰による義という理解に繋がっていたのです。ユダヤ人の考えによれば、救いはユダヤ人に限られていたのですから、外国人、つまり異邦人が救われるためには、正式の儀式と手続きを経て、ユダヤ人とならなければならなかったのです。その正式の儀式と手続きを端的に表現したのが「割礼」でした。すべてのユダヤ人男性は血筋においてユダヤ人として生まれただけではなく、みな、割礼を受けていました。ですから異邦人が救われるためには、どうしても「割礼という行い」の儀式を通らなければならなかったのです。(女性の場合は、洗礼を含む他の規律が適応されていました)

パウロの理解によると、ユダヤ人は神の祝福をもたらす器として選ばれたという意味で特別であっても、救い自体は同じ条件で平等に与えられるものでした。パウロはこの問題を、「割礼という行い」と、「行いによらない信仰」の関係で論じましたので、あたかも、割礼という儀式の問題だけに

[1] 煉獄とはカトリック教会が作り出した教えで、天国には行けず、さりとて地獄に行くほどの悪人ではない人々が、死後に行く場所です。そこに行った人々は、この世で行った数々の悪行の報いを受けて苦しみますが、悪行に応じて充分に苦しんだ後、天国に入ることが出来ることになっています。

理解されがちですが、実際は、民族主義や文化の問題でもあったのです。初代のクリスチャンたちの大多数もユダヤ人で、ごく当たり前のこととして、異邦人が救われるためにはユダヤ人にならなければならない、ユダヤの法律やユダヤの習慣を守り、ユダヤ文化を受け入れなければならないと考えていました。

ところがパウロは、人は自分の国籍や文化を変える必要はなく、ありのままの自分、そのままの姿、自分自身のままで救われると主張しているのです。このパウロの神学的理解によって、キリスト教は狭いユダヤ主義から開放されて、世界中のすべての人々に平等に救いを与える、普遍的宗教に生まれ変わったのです。もちろん、そのような普遍性はすでにキリストによって明らかにされ、旧約聖書にさえ示されていたのですが、それを明確に教えたのは聖霊の啓示を受けた使徒パウロだったのです。使徒パウロが異邦人のための使徒と呼ばれるのは、彼が単に異邦人の土地に出向いて福音を伝えたからではなく、真に、福音を異邦人のために理解しなおしたからなのです。

C.　信仰という言葉の問題（信仰の定義）

信仰によって救われるという大原則ですが、どうも、この信仰という言葉の意味がはっきりしません。曖昧模糊（あいまいもこ）として、何のことやら良く分からないのです。信仰と聞くと、なにかこう、絶対にあり得ないことを無理やりに信じ込まなければならないような、理性に合わないというか、不合理というか、そんな感覚が先立つのです。「イワシの頭も信心から」などという、極めて日本人的観念論の言い習わしが、脳裏に浮かんできます。

「信仰」というのは日本語です。それなりに意味深く良い言葉ではありますが、聖書の教える神を信じるという意味とは、少し違うようです。むしろもっと単純に、「信頼」と訳されたほうが分かりやすいと思います。信仰というと、観念的な、空想や想像、実体もとらえどころもない感じがしますが、信頼というと非常に具体的です。もっと簡単にいうと信用すること、頼ることです。神を信じたというのは、神を信頼した、神を頼ったという意味です。信仰による救いとは、神に頼ったために与えられる救いです。神はご自分を頼って来る者を、お救いになるということです。これなら分かるでしょう。いるかいないかさえ証明できない、神の存在を無理に認めて信仰するのではなく、人として心の奥に感じている神に信頼することなのです。

信頼とは、その人の言うことを信じて行動することです。道を知らない人がカーナビを頼りに運転するとき、カーナビの指示に従います。それが信じるということです。言われた通りに行動することです。言った人が近くにいても、遠くにいても、あるいはすでに他界していても、その人を個人的に知っていてもいなくても、信じたらその人の言うことに従うのです。神を信じるということは、神の言葉、神の教えに従うことなのです。

アブラハムは神を信じました。これは、神がおっしゃったことを受け入れて、これに従ったということです。このときのアブラハムは、まだ神についてあまりよく知りませんでした。でも、信じたのです。ですから、聖書が教える信頼とは結婚のようなものです。だれも、相手のことを１００％知って、理解してから結婚したのではありません。多くの場合、良く分からないのに気持ちが先立

ち、ある程度の信頼性にすがって結婚に踏み切ったのです。清水（きよみず）の舞台から飛び降りるような気持ちで、「ままよ」とばかりに結婚してしまったのです。結婚した人のほとんどは、人生の重大問題にそんな軽はずみの決断をしているのです。結婚するくらいの軽はずみさがあるならば、見えない神を信じるくらいの軽はずみは、充分に弁明できるはずです。結婚は不完全な人間同士のことで、軽はずみな決断にも慎重な決断にも、失敗が付いてまわります。でも神に対する信頼は、たとえ軽はずみでも裏切られることがありません。

D.　何に対する信頼か（出来事か「お方」か）

ちなみに、以下の言葉が正しいか間違っているか答えてみてください。「人は、キリストが自分の身代わりに罪の刑罰を背負い、十字架にかかって死んでくださったと信じるならば救われます。」

多分、大多数の神学者や牧師、あるいは神学生や学びを積んだ信徒たちは、「正しい」と答えるでしょう。でも、これはとんでもない間違いです。人は、出来事に信頼して救われるのではありません。神学でも教理でも教えでも、歴史的事実でもその説明でもなく、人間と同じように心を持っておられる、神という「お方」に信頼することによって、キリストという「お方」に信頼を寄せることによって救われるのです。このお方を信じること、頼ることによって救われるのです。言い換えると、私たちの罪の刑罰を身代わりに背負い、十字架に架けられて死に、三日目に甦り、いま私たちと共に生きていてくださり、私たちを救おうと待ち構えていてくださる、キリストという「お方」に頼ることによって救われるのです。

私たちが伝統的に受け継いだ西欧の神学によると、私たちは、イエス・キリストが私たちの罪の身代わりに死んでくださったと信じ、自分の罪を悔い改めなければ、救われることが出来ないのです。それが、聖書の教えだと信じてきました。そのために私たちは、神の救いを語り、人を救いに導くには、大変な知識と話術を必要とすると思い込んでしまいます。事実、日本人にイエス・キリストについて説明するだけでも、大変なことです。日本人に罪について理解してもらうのは至難の業です。ましてや悔い改めに至らせるなどというのは、そんじょそこらの信徒に出来ることではありません。ですから、伝道など、始めから自分にはできないと諦めてしまうのです。それよりも何よりもまず、自分がイエスキリストについて、その死と意味について、自分の罪と信仰について、正しい理解をもっていなければなりません。そんなこと、とてもとてもと感じてしまいます。

伝統的なプロテスタント神学では、人が救われるのは信仰によるのです。行いによるのではありません。でも実情は、まず「理解するという行い」から始まって、たくさんの行いがなければ救いに到達しないのです。筆者の次男は 1975 年生まれで今年 35 歳になりますが、障害のために知能は 4 歳くらいもあるでしょうか。彼には、キリストの死と甦りの意味、人間の罪と悔い改め、神の赦しなどの基本的教えの理解さえ無理でしょう。神学的理解、歴史的事実の理解が救いには必要だとすると、この次男は絶対に救われないのです。

E.　アブラハムの信頼（パウロ神学の論拠）

そこで、パウロの信仰による救いの神学の基盤となった、アブラハムの信頼についての記述を少しばかり調べてみましょう。

まず、アブラハムの信頼は天地創造の神に対するものでした。これは、神というお方に対する信頼であって、神についての知的理解にたいする信頼ではありません。知的理解ということで言えば、この時点でのアブラハムの神知識は非常に限られたものでした。多分、月を神として礼拝していたシュメール文化に育ったアブラハムは、天地創造の神という方については、ほとんど何も知らなかったことでしょう。あるいは霊的な直感力で、かなり正しい神知識を持っていた可能性も、否定はできません。ただ言えることは、そのような彼の信仰態度をご覧になった神は、ご自分の側からアブラハムに「近づいて」、ご自分を現してくださったのです。

アブラハムは、神の自己啓示によってのみ神を正しく理解できたのです。神の自己啓示は学校の教室の中での学びではなく、日常の生活の中での具体的な自己啓示でした。アブラハムは、体験、経験の中で、神を学び取って行ったのです。アブラハムは多くの神々が存在する中から、ご自分を啓示し、豊かな土地を与えてくださると約束してくださった、天地創造の神を選びその神に信頼して行動しました。

神はアブラハムの信頼を義と認めてくださいました。そのアブラハムの信頼は、アブラハムに子どもを与えてくださるとおっしゃった、神への信頼であり、神の約束の言葉への信頼です。つまり、アブラハムが救いを得た信頼は、非常に単純な信頼であり、この時点では、まだキリストのキの字も出て来ていません。アブラハムの信頼は、キリストの十字架だとか、贖いだとか、身代わりだとか言う、教えや神学の理解とは関係のないものでした。さらに、プロテスタント神学では救いに欠くことが出来ない悔い改めさえ、この場面には出てきません。アブラハムは、キリストに対する知識とは一切関係なく救われたのです。

F.　アブラハムの義の基

ではアブラハムは、キリストの贖いとはまったく関係なく、ただ、神に対する信仰だけで救われたのかというと、そうではありません。たとえアブラハム自身はキリストを知らなかったとしても、神がキリストをご存知だったのです。人にとっては、過去、現在、未来という時間区分がありますが、時間を超越しておられる神にはそのようなものはありません。神は、やがて十字架で贖いの業を完成してくださることになっていた、キリストのゆえに、アブラハムの信頼を受け入れることが出来たのです。大切なのは、アブラハムが何を知っていたかではなく、神が何をして下さろうとしていたかです。神のご計画と知識の問題です。

もしも、人の救いは、キリストの十字架のみ業の理解を前提とするとなると、それは、人の理解という行為による救い、行いによる救いになってしまいます。当然、アブラハムを始めとする旧約時代のすべての聖徒たちは救われないことになります。あるいは、旧約時代の人々は何か別の原則で救いを獲得したことになります。旧約時代の人々も新約時代の人々も、同じ原則によって救われました。その原則は信頼です。その救いの基となったのは、キリストの贖いのお働きです。旧約時

代においては、キリストについての知識は要求されませんでした。新約時代においても、キリストについての知識は、絶対必要条件ではあり得ないのです。もっと明快に言えば、キリストを知らなくても救いを得ることができるということです。人がキリストを知っているかどうかが問題ではなく、神が、キリストをご存知だということが最も大切な事実なのです。

G.　キリストへの信頼

キリストとそのみ業、そしてそれに対する信頼は、直接的にはユダヤ人に与えられた聖書に記されています。ユダヤ人は、その先祖のアブラハムとは異なって、天地創造の神についての知識を持ち、律法も与えられていました。救い主、すなわちキリストについての預言の約束も知っていて、その出現を熱烈に期待していました。したがって彼らに求められたのは、アブラハムの場合のような神への単純な信頼とは異なって、キリストを信頼することでした。それが、神への信頼であり、神の言葉への信頼だったのです。キリストを信じないのは神を信じないことであり、キリストを信じるのは神を信じることでした。

とはいえ、そのユダヤ人のキリストへの信頼さえも、キリストのみ業の深い理解とか、神学的把握とか言うものが要求されたのではありません。必要だったのは、キリストというお方への単純な信頼でした。極言すれば、キリストについての知的理解がどれほど希薄であっても、キリストに対する単純な信頼さえあればよかったのです。新約聖書に記されている信仰の大部分は、キリストに対する単純な信頼でした。それは同時に、ちょうどアブラハムが持ったような、神への単純な信頼だったのです。

H.　パウロの宣教

パウロの宣教は、天地創造の神についての知識も、キリストについての期待も持っていたユダヤ人に対するものから、天地創造の神についてもキリストについても一切知らない、異邦人に対するものに変わっていく過渡期にあたっていました。パウロの実際の働きは、確かにまったくの異邦人に対する働きも含まれていましたが、ほとんどの場合、特に前半においては、ユダヤ人社会でのものでした。

当時パウロが行き巡った土地の町々には、大概、かなりの数のユダヤ人居留者たちがいて、私たちの教会の前身ともいえる、ユダヤ人の会堂がありました。そこでは生粋のユダヤ人と、異邦人との混血であるけれど、ユダヤ人として認められていた人々、さらには異邦人からユダヤ教に改宗してユダヤ人になった人々などが、共に毎週集まって集会を開いていました。彼らの周囲には、まだ完全にはユダヤ教に改宗してはいないけれど、ユダヤ教に同情と理解を持ち、その教えを受け入れていた、異邦人たちもかなりいたと考えられます。パウロの宣教は、まずそれらの会堂を回り、ユダヤ人たちに福音を語り、それから異邦人に接触していくというものだったのです。

したがってパウロの説教や教えも、まだまだかなりユダヤ人的なものであったと思われます。パウロの足跡を注意深くたどると、そのようなところが見えてきます。ですから、彼が異邦人だけを

対象に説教をした場合、その内容はかなり異邦人向けのものであり、異邦人を意識した話し方であり、話題もきっかけも、異邦人の立場に立ったものであったとしても、まだまだ、完全に異邦人向けにはなりきっていなかったと考えることができます。つまり、たとえば日本のような、まったくの異邦人社会に対するものとしては、まだまだだったといえるのです。

Ⅰ．　パウロの異邦人向け説教

パウロの異邦人向けの説教は、使徒の働き 17 章に記されている、アテネにおける説教が良い例です。パウロはここで、異邦人に対する模範的な導入で始めています。彼は、異邦人には馴染みのなかったキリストから話を始めるのではなく、異邦人にとっても一般的な、神の概念から話を始めています。そしてその話を始める前に、アテネの人々の宗教心の篤いことを賞賛し、まず、聴衆に心を開かせようと努力しています。そして、アテネの人々が知らずに拝んできた神が、パウロの信じている神であって、まったく知らない神、外国の神を持ち込もうとしているのではなく、もとからアテネにもいて、アテネの人々に拝まれてきた神の話をしようとしているのだということを、印象づけようとしています。その上、アテネの人々が良く知っていたであろう、ギリシヤの詩人の言葉まで引用して、聴衆であった異邦人との共通意識を築き上げようと苦心しています。

このようなことはユダヤ人の間での宣教にはありえませんでした。それだけ、異邦人宣教であることを意識しているのです。神は偶像礼拝を見過ごしにされてきたとまで語り、いまや、悔い改めるべきときに来ていると告げています。ただ、この「悔い改め」と言う言葉は、キリストや使徒たちが用いた悔い改めという言葉と同じですが、その意味は異なっていたと理解されなければなりません。もちろん、キリストが語ったのはヘブル語、あるいはアラム語に近いヘブル語であり、新約聖書に残されているキリストの言葉は、ギリシヤ語に翻訳されたものであることを知れば、むしろ弟子たちが、ユダヤ人やクリスチャンたちに対して用いた、「悔い改め」という言葉のほうが正確です。

弟子たちが用いた「悔い改め」と言う言葉は、すでに何世紀も前からギリシヤ語として用いられていて、本来、「考えを変える」という意味だったのですが、少しずつ「心を変える」というようにも意味が変わり、ユダヤ教の文書の中ではキリストの時代の少し前から、ユダヤ教的な「悔い改め」という意味で用いられるようになっていました。それがそのまま、初代のクリスチャンたちの間でも、一般的に用いられるようになったのです。

ところが、アテネにおいてこの同じ言葉をパウロが語ったとき、ユダヤ人的意味合いで語ったのではないと考えるほうが、良いと思われるのです。なぜなら聴衆のギリシヤ人たちは、この言葉にダヤ人的な悔い改めと言う意味を、持たせていなかったと判断されるからです。パウロは異邦人の町で育ち、ギリシヤ語を使いこなしていたユダヤ人として、そのような言葉の違いを理解していたことでしょう。ですから、ここでパウロが言ったのは、今のわたしたちクリスチャンがふつうに言う「悔い改め」ではなく、当時のギリシヤ人たちが理解していた、「考えを変えて」とか「理解を変えて」ということだったはずです。「あなたたちはいままで、そのような神の理解の仕方をしていたのだが、いまはそのような考え方を変えて、天地の造り主である神を信じるときに来ている」とい

う意味です。そう理解すると、パウロは、何が何でも現在の私たちが言うような、「悔い改め」をさせようとしたのではないことが分かります。

J． パウロの失敗

パウロは偉大な使徒であり、あたかも、決して間違いを犯さない人物であるかのように思われがちですが、彼も人の子、多くの経験や体験から学び続けていました。当然、失敗も間違いも犯しました。アテネにおけるパウロの説教の失敗は、彼の異邦人に対する対応が不充分だったことにあると思われます。

もちろん、使徒の働きに記されているパウロの説教は、もっともっと長い説教の要約に過ぎないと思いますが、やはり感じるのは、パウロが突然説教の流れを変え、早々にキリストとその復活、あるいは裁きなどに話を持って行ってしまったことです。つまり、パウロは急ぎ過ぎたということです。それには理由がありました。パウロはすぐにでもアテネを後にする予定であったため、ゆっくりと時間をかけて、キリストとその働きについて語る余裕がなく、先を急がざるを得なかったのです。

異邦人であるアテネの人々は、旧約聖書を知りません。天地の創造主である神についても、おそらく初めて聞いたことでしょう。ましてやキリストのお働きや復活や裁きの話になど、とてもついていくことが出来なかったはずです。ユダヤ人の間であるならば、「受け入れる、受け入れない」の差はあったとしても、話自体にはかなりついていくことが出来たはずです。そういうわけでアテネにおいては、聴衆の大部分が福音に背を向けてしまったのです。とはいえ、数人の有力者たちがパウロの語った福音を受け入れたのも事実です。ですから、ここにはパウロの能力の高さ、聖霊の御働きの顕著さが現れていると考えられます。

II． 日本人を救いに導きましょう

さて、私たちがいま生きている日本は、ユダヤ文化でもグレコローマンの文化でもありません。パウロが活動したような、ユダヤ的な背景を持った人々がかなりいるといった環境ではないのです。まったくの異邦人文化、異教文化です。それはパウロの世界よりもアブラハムの世界に近いものです。このような、まったくの異教文化に生きる人々に救いを伝え、救いに導くにはいったいどのようにすればよいのでしょう。

A． 神の紹介をする

日本人はユダヤ人ではありません。天地創造の神を知らない民族です。天地創造の神を知らない人々には、まず、なんとしても天地創造の神を知らせなければなりません。それはパウロが、同じように天地創造の神を知らないアテネの人々に、まず天地創造の神から話を始めたのと同じ理由で

す。

パウロは早々とキリストの話に切り込んでいきましたが、私たちが日本人に救いを伝えるためには、もっともっと時間をかけて、ひとつひとつ階段を上るように、あわてずに、日本人の神理解と天地創造の神のみ姿の間にある、深い溝を埋めていく必要があります。本当のところ、神についての理解が非常に希薄な日本人が、天地創造の神の存在を認めたならば、ほとんど９０％、クリスチャンになっていると言われるのです。

１．　日本人の信心深さをほめる　アテネを訪ねたパウロは、アテネの人たちの宗教心の篤（あつ）さを認め、これをほめています。偶像礼拝がはびこっている事実には憤りを感じながらも、宗教心の篤さ、その熱心さをほめているのです。日本人もまた、非常に宗教心に富んだ人々です。いたるところに宗教施設があり、人々は様々な神を祀り、熱心に礼拝しています。私たちもまた、この日本人の姿を認め、ほめて上げるべきなのです。宗教心は神に似せて造られた人間の本能であり、まさに、人間が人間であることの証明です。人間とは神を礼拝する動物なのです。

人間は、自分を認めてほめてくれる人には心を開き、言うことを聞くものです。福音を語るときに大切なのは、聞く人が心を開くようにすることです。パウロはその点で成功したのです。残念ながら、日本に来た大多数の宣教師たちは、ここで大きな失敗をしてしまいました。彼らは日本人の宗教心の豊かさを偶像礼拝の罪と断じて、これを激しく糾弾して日本人を怒らせてしまったのです。宣教師たちはまず、日本人に心を閉ざさせる働きから始めたのです。

宗教心が高いことは、神を意識していることです。神を意識していない人間に、神のことを教えることは不可能です。生まれたばかりの赤子が、乳を吸う本能を持っていなかったとしたら、乳を飲ませるのは大変難しい仕事になるでしょう。乳を吸う本能があるからこそ、安心して乳房を与えることができるのです。神という本能的意識があるからこそ、神を礼拝したいという気持ちがあるからこそ、私たちは神を伝えることが出来るのです。

また古来、日本人の宗教心の表現である神道には、偶像がないことも非常に大切で素晴らしいこととして認め、賞賛しなければなりません。偶像は仏教の伝来と共に日本に入ってきましたが、本来の日本人の宗教心に偶像はないのです。はなはだぼやけた感覚ではありますが、大きな目に見えない神、人間の感覚をはるかに越えた神が、日本人の心の神なのです。偶像を持たない古来の日本人の信仰は、日本人の倫理観が世界的にも非常に高いものであることの、大きな理由の一つでしょう。少なくても、偶像礼拝が倫理観の欠落に繋がっているというのが、霊感を受けたパウロの教えなのです。日本にやってきた宣教師たちが、もう少し注意深く日本の宗教を観察していたならば、日本人の心である神道のすぐれている点が良く分かったはずなのですが、独断的に、偶像礼拝として裁くことしかできなかったのは、非常に残念なことです。

２．　日本人が心に感じている神を認めてあげる　　日本人は面白い国民で、知的な言い方をすると、圧倒的多数の日本人が神の存在を否定します。幽霊の存在は断然多くに信じられているのに、神の存在は否定されているのです。ところが神の存在を否定しているその人々も、折に触れては神

社仏閣にお参りをして、祈ります。ですから日本人に対しては、神の存在を否定することになる知的なアプローチはしないことです。むしろ、神社仏閣にお参りをする、感覚的な、あるいは情緒的な方面から、神を語るべきです。

人間は神の姿に似せて創造され、誰でもみな、心で神を感じることが出来るように造られています。ですから、理屈ではどんなに神の存在を否定していても、心では否定できないのです。もしも、話が知的理解の方向に向いたなら、「私たちの神は無限に大きな神で、小さな頭脳でわずかなことしか把握できない、私たちの理解力をはるかに超えた方であるために、私たちが理解したと思ったとたんに、私たちの神は神でなくなるのだ」と教えればいいのです。

人間が知力では神を知ることが出来ないのは、ちょうど、コップで海の水の量を測ることが出来ないのと同じ理屈です。コップで測ることが出来る水の量は、海ではないのです。私たちの神は、たとえ頭の良い日本人でも、理解できるほど小さな神ではありません。ところが、たとえ頭の悪い人でも、心で感じている神なのです。ほとんどの日本人は、心の中で、神を感じているのです。コップで測ることができない海の水も、触れれば分かります。頭で理解できない神も、心で触れれば分かるのです。

私たちは自分の周囲にいる父や母、あるいは友人や知人のことさえ、良く分かりません。そのような小さなものさえもよく理解できない、私たちの微弱な能力では無限の神を理解することが不可能なのです。ところが、たとえ理解できなくても、私たちは父を知っており、母を知っています。そして友人を信頼し、知人を頼ります。私たちの神は知識の対象ではなく、信頼の対象なのです。周囲の人々を信頼するように、神を信頼したらよいのです。

３．　昔から日本にいてくださった神をについて語る　日本人は昔から神を信じてきました。私たち日本のクリスチャンが信じている神は、外国から持ち込まれた神ではありません。昔から日本にいて、日本を祝福し、四季を与え、緑の山を与え、青い海を与え、清らかな川を与え、花を咲かせ、実を稔らせ、豊かな収穫を与え、動物を育て、魚をふやして、日本人の心を喜びで満たしてこられた神です。

私たちの神は、天地創造このかたずっと日本の神だったのです。ずっと日本にいてくださったのに、日本人は知らないでいたのです。それはちょうど、キリストがずっとこの世にいてくださったにも拘わらず、この世の人々は彼を知らず、認めることができなかったのと同じです。（ヨハネ１：９）

そういうわけで私たちは、まず、ずっと日本にいてくださった神について語ります。キリスト教については語りません。ほとんどの日本人にとって、キリスト教は外国の宗教です。キリストと聞いただけで、違和感や嫌悪感を持ってしまうことが多いのです。その点、「神」は極めて日本人的な言葉であり、日本人的概念です。日本人の心に、すんなりと入って行くのです。ですから、あまりに早くキリストに話を持って行くのは、日本ではかしこい方法ではありません。

４．　日本人が知らないで拝んでいた神を紹介する　「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」という歌があります。神道と仏教を混ぜ合わせたような信仰を持っていた、西行法師というお坊さんが詠んだものですが、日本人の宗教観を最も良く表していると言われています。ふつうの日本人は、まさにこの歌に詠まれているように、どなたがいらっしゃるのか良くは分からないけれど、自分はそのお方に生かされていると感じているのです。毎日新しい朝を迎えることが出来ること、優しい自然に取り囲まれていること、衣食住を与えられていること、人々と仲良く暮らしていけることなどを思い巡らせると、ただただ「ありがたいなぁ」「かたじけないなぁ」と、涙を流すだけだと感じ入るのです。

日本人は、たぶんパウロが語ったアテネの人々よりも、「知られない神」を心に深く感じながら、感謝と畏れをもって生きています。その日本人が心に感じ、感謝と畏れをもって崇めて来た神こそ、私たちが信じている天地創造の神です。私たちは、日本人がまったく知らない、外国の神を連れて来ているのではありません。日本人に馴染みの深い、昔から日本にいて、何かにつけて日本人が崇めてきた神について話をするのです。ただ、日本人はこの歌に詠われているように、その神がどなたであるかを知らないまま、奉ってきただけです。「私たちはこの神について、多くの日本人よりほんの少しだけ知っているだけに過ぎませんが、この神についてお話したいのです。私たちは聖書という書物によって教えられて、この神が誰であるかを教えられたからです。どなたであるか知らないままで崇め感謝をするより、はっきりとどなたであるかを知って、崇め、感謝を捧げるほうが良いと思うのです」と、お話するのです。

またここで、日本人が知らないまま神を崇め感謝をしてきたのは事実であっても、やはり、その感謝と礼拝は不充分だったことも、知らせてあげましょう。恵み深い神に対して、私たちは不義理を重ねてきたところがあると、優しく語りながらも認めさせましょう。つまり、ここで、本当の罪について触れておく、罪意識を芽生えさせておくのです。

５．　日本人が感じている唯一の神を明らかにする　日本には八百万の神々がいるといわれます。確かに、日本人は何でも神にしてしまいます。でも、これを多神教と定義づけてしまうには問題もあります。ここでいわれる神とは、クリスチャンたちが考える神とはいささか違う意味だからです。日本人はたとえ八百万の神々がいると信じていても、それらの神々を礼拝することはまずありません。日本語の「神」は、「神」という漢字をあてがわれただけで、元々は「上」を意味する「カミ」と発音する言葉だったのです。日本語では高いところを「カミ」といいます。上座、川上などがそうです。また、「カミノケ」も、今は他の漢字があてがわれていますが、もともとは「上の毛」だったのです。その他、守、頭、など色々ありますが、普通の人間より力や権力を持っていたり、特別な能力を持っていたりすると、神と呼ばれるのです。釣りが上手なら釣りの神様、野球がうまければ野球の神様、料理が得意なら料理の神様と言う具合です。死んだ人も、生きている人の及ばない力を持つと信じられ、みな神にされてしまいます。ですから、日本人がこのような神々を礼拝することは滅多にありません。むしろ、かえってばかばかしいと感じて、「俺は神なんて信じない」と言ってはばからない理由になっているのです。

ところがこのような日本人が、実は非常に強い一神教、唯一神教的要素を持っています。それは

日本人が理論的に信じているのではなく、実際に唯一の神として礼拝しているのでもありません。むしろ、自覚さえしていないほどのおぼろげな感覚と言えるかもしれません。しかし、説明さえされれば、ほとんどの日本人が納得できるのです。

ふつうの日本人は、だれでも神社に詣でます。やれ正月だ、それ入学試験だ、なんだかんだと言って色々な神社に出かけます。大きな有名な神社から小さな社（やしろ）や祠（ほこら）まで、訪ねては手を合わせ、感謝をし、願い事をします。多くの場合、それぞれの神社にはそれぞれの謂れと歴史があり、祀られている神々があります。ところが、それらの神社に詣でる日本人は、いちいち祭られている神が誰であり、どんな方であるかなど問題にしません。すべての神社を同じ気持ち、同じ感覚で訪ねるのです。祀られている神の名さえ、呼ぶことはほとんどありません。日本人はどんな神社に詣でても、そこに祀られている神がどのよう神であっても、それは表面上の神であって、結局はひとりの大きなお方、恵みと憐れみと豊かさに満ちたお方が背後におられると、直感的に、あるいは本能的に感じて、そのお方に祈り、礼拝し、感謝を捧げ、願い事をしているのです。

「わけのぼるふもとの道は多けれど　同じ高嶺の月をみるかな」という歌は、ふつう、クリスチャンには嫌われています。どんな宗教でも、結局は同じだというように取られるからです。しかしこれは、日本人の一神教、唯一神教的感覚を表現したものと理解すると、日本人伝道の糸口となるのです。獣や鳥や這うものを神として祀ることが、いかにばかばかしいことかと感じて、無心論者を自認している多くの日本人も、この極めておぼろげではあるけれどもかすかに残る、本能的な唯一神論的意識は大切にして、宗教自体を悪く言うことは少ないのです。私たちはこの日本人の本能的な神意識を大切にして、そこに訴えることによって、日本人と同じ気持ちになって天地創造の唯一の神について、語ることができるはずです。

B．この神を信頼して生きるように励ましましょう

日本人が、かすかにでも神の存在、特に天地創造の神の存在を認めたら、今度はその神に頼ること、信頼することを教えるのが大切です。完全な神理解を持たせる必要はありません。そのようなものは、教えるほうだって持っていません。大切なことは知的理解ではなく、信頼です。信頼は体験的知識を与え、さらに信頼を増し加えます。幼子は、体験的知識の積み重ねで母親を知り、信頼を増し加えていくのです。

１．　この神だけを信頼するように励ます　　天地の創造者である神について話していく合間に、この神を自分の神として選び、この神を信頼するように励ましてあげることが大切です。アブラハムが義とされたのは、他の神々を迷信として排除したからではありません。天地を造られた神を、自分の仕える神として信頼したからです。多くの神々の中から、天地創造の神を自分の神として選択して、この神に頼ったのです。その時、アブラハムと神の間に生きた交わり、交流が深められたのです。

それはちょうど、多くの男性の中から一人の男性を選び、自分の夫と定めるようなものです。多くの男性がいることを否定するのではなく、一人の男性を選ぶのです。それが結婚です。そして一

度結婚したら他の男性に目を向けることなく、その男性を信頼し、その男性との生活をたいせつにして、その男性に尽くすのです。私たちの神に対する信頼は、基本的に人間の間の信頼と同じです。私たちが神に頼ると神はこれに応えてくださり、助けが必要なときには助けを与えてくださり、励ましが必要なときには励ましを、力が必要なときには力を、勇気が必要なときには勇気を与えてくださるのです。そのような神の応答を体験するごとに、私たちの信頼と喜びと感謝と平安がまし加わり、幸いな人生へと向かうのです。

ですから、たとえ日本人が多くの神々の存在を信じていても、その神々の力を信じていても、いろいろな怪奇現象を信じていても、幽霊の存在を信じていても、そのようなことは、基本的にクリスチャン信仰の妨げにはなりません。旧新約聖書を読めば、そのような存在を信じる充分な理由があるのです。それを否定しなければならないというのは、聖書の信仰ではなく、西欧の啓蒙主義の信仰です。

２．　この神に祈ることを薦める　神に対する信頼は、祈りによって表されます。ですから、日本人に神の話をするときは、祈りが大切です。幸い多くの日本人は、祈りを大切にし、私たちが祈って差し上げるのも受け入れてくださいます。祈りは信頼の表現であり、信頼は祈りによって表されるのです。ですから、たとえ理解したところはわずかでも、お祈りを薦めるのです。なにか切羽詰った問題があれば、その問題の解決を願って祈るのもよいでしょう。そうでなければ、生かされていること、必要なものを与えられていることを感謝するのが良いでしょう。私たちの周りには、感謝すべきことがたくさんあることを教えてあげましょう。

美しい自然、めぐり来る四季、昇る太陽、慰めの月星、豊かな穀物、おいしい野菜、美しい花々、可愛い動物たち、新鮮な魚、ひとつひとつ数え上げ、感謝するのが良いでしょう。「なにごとのおわしますかは知らねども」の祈りではなく、はっきりと、天地をお造りになった神、万物を調和の中に置き、人々に喜びを与えてくださった神に向けて、感謝をするのです。そのような信頼と感謝に、神は必ずお応えくださるのです。そしてその神の応えの体験を積み重ねるごとに、心には更なる信頼と感謝が生まれるのです。

３．　ゆっくりと時間をかけて信頼を強めていかせる　アブラハムは一日のうちに天地創造の神について知り、その日のうちにこの神を自分の神として選択したのではありません。「義とされた信頼」を持つに至るまでは、相当ながい年月を費やし、神と交わり、神の助けと導きを体験し、神についての知識を積み重ねてきたのです。神の側から、ご自分を示してくださったのが先なのです。一般的日本人の場合も、アブラハムのような信頼を持つに至るまでには、かなりの長い年月が必要です。西欧の宣教師たちは、インスタント・クリスチャンを作るのに熱心です。「私は何月何日にキリストを信じました」という証を大切にします。でもそのようなことは、日本ではまず滅多に起こらないのです。長い年月、継続が必要なのです。

ただしアブラハムは、義と認められる信頼をもったその時よりも前から、神を信頼して生きていました。どのときのどの信頼を、神が義と認められるかは、神の側の主権に属することで、私たちがとやかく言う問題ではありませんが、アブラハムはすでに神を信頼していたのです。その信頼の

積み重ねが大切なのです。神は信頼するものを受け入れ、その信頼にお答えになるのです。

日本人も、まず神に信頼することを教えられ、励まされ、だんだんと信頼を増し加えていくのが良いでしょう。アメリカの伝道の話を聞いて、先を急いだ伝道をするのは賢くありません。まどろっこしいかもしれませんが、ゆっくりと時間をかけ、神様について話をしながら、信頼することを教えるのです。聞く人たちは、心の中で行きつ戻りつをくり返しながら、徐々に、神がお求めになる信頼に近づいて行くのです。理解できなければ信頼できないなどという「神話」を信じないことです。

４．　倫理的キリスト教を避ける　その間、あまり「倫理的キリスト教」を持ち出さないようにしましょう。まず信頼が先です。信頼と感謝と愛が少しずつ加えられたら、その表現として、神に喜ばれる人となろうとするのです。神に喜ばれようとすると、強制としての倫理ではなく、してはならない、遣ってはならない、あれもだめ、これもだめのクリスチャン信仰ではなく、何をやってもよいけれど、神様のお喜びになることをしよう。悪いことをする必要はなくなった、悪いことが止められるようになった、悪い癖が消えてしまったという、聖霊による新たな生き方のクリスチャン信仰になるのです。

神を信頼すると、たとえ小さな信仰でも神がその人のうちにお働きになり、感じ方、考え方、生き方が変化するのです。そのようにして、神を体験させることが重要です。ともすれば、証にならないからなどと、クリスチャンになるかならないかの境目にいるような人たちにまで、四角四面の生活を強いてしまうのが、これまでの遣り方でした。しかし、まず神の力を体験させる方法に変えてみましょう。すると四角四面の生活も四角四面ではなく、喜びに満ちた自由な生活になるのです。

C．　キリストについて話す

キリストについて話すのは、これからでも遅すぎることはありません。人の救いはキリストについての知識によるのではないからです。

１．あまり理屈っぽい話はしない　中には知ったかぶりの人がいて、キリストと神の関係だとか三位一体だとかについて尋ねられるかも知れません。それが本当に求道心による質問ならば、答えて上げるのも良いでしょう。それでも、キリストについての知識の提供に終わらず、必ず話を信頼に持っていくこと、信じるという一点に持っていくことが大切です。信じるのは、神であってもキリストであっても良いのです。どちらにしても、知識によって救われるのではありません。神がすべてを整えてくださったのです。キリストが救いの道を準備してくださったのです。その神に、そのキリストに信頼すれば良いのです。

神とキリストとの関係について尋ねられたら、正直に、よくは分からないと答えるのが良いでしょう。本当に、まじめな求道的な興味を持っている人には、神様の本質に迫る事柄は、自分の小さな頭で説明できるほど単純で浅薄なものではないと、素直にお話ししてあげるのがよいでしょう。無限の神の本質に関わることについて、小さな頭の持ち主である人間が、理解できるとか説明でき

るとか考えるほうが、よほど間違っていることを教えてあげればよいのです。たとえばある人たちは、人間は心と精神と霊と魂と肉体から出来ているといいます。あるいは体と心だけだという人もいます。本当のところ、だれにも分かりません。心と体がどのように繋がっているのかも、説明できません。それなのに、大きな、大きな、大きな神を、理解しようとしているのは笑い話です。父と子と聖霊なる神の神秘的一致と関係を、自分の頭で理解できないから信じられないと言う人間のほうが、よほどおかしいのです。人間の小さな頭で理解できる神は、たんなる有限の存在に過ぎず、私たちの神ではないのです。ですから、いちいち説明しないで神はキリスト、キリストは神でかまわないのです。

結婚している人なら、「私は夫のことがさっぱり分からないけれど、信頼して生きているわ」と言い、「妻はまさに不可思議な動物ですが、信頼してやってます」と言って、それと同じように、神様を信頼すればいいのですと説明すると分かります。

２．信頼することを教える　信仰とは信頼です。信頼することをくり返し強調するのです。私たちは人間同士、互いに信頼してお付き合いをします。でも、人間というものを完全に理解して信頼するのではありません。理解しないまま、理解できないまま、良くはわからないまま、心を通わせて信頼するのです。同じように、神を信頼するのも神を理解して信頼するのではなく、心を通わせて信頼するのです。その点を強調するのが大切です。

だれでも自分を信頼するものを大切にします。信頼に応えようとします。信頼するものを助けようとします。自分を頼って来る者を可愛く思い、いとおしく感じ、その幸せを願います。それが人間の心であり自然の姿です。その人間の心は、神様の心に似せて作られたのです。神様と呼ばれようと、キリストと呼ばれようと、天地をお造りになり、人間をお造りになった神は、ご自分を信頼するものを大切にし、守り、恵み、助け、救い、永遠のいのちまで与えてくださるのです。

人間の中に、完全に正しい人など存在しません。完全に清く正しい神様のみ前には、すべての人が罪人です。その罪人たちの中から神様は、自分を信頼し、自分の恵みの豊かさに頼ってくる人々を、救おうとされたのです。どんなに立派な生き方をしても、どれほど自分の正しさを主張しても、人間は罪人に過ぎず、神様のぜったいに高い聖さのスタンダードには及ばないのです。人間は神様の聖さのスタンダードには関わりなく、神様の恵みによって、つまり、受けるに値しない者に与えられる愛によって、救われるのです。神様の恵みに信頼する者を、神様は愛（め）で、いとおしみ、祝福し、救ってくださるのです。

３．祈ることを教える　信頼するということはお付き合いをすることです。お付き合いとはお話をすることです。そして嬉しいこと、楽しいこと、悲しいこと、あることない事をおしゃべりし、よいことをしてもらったと感じたら、ありがとうございますとお礼を言い、困ったときにはちょっとお願いがあるのですがと、頼みごともして見るのです。

神様に対してもまったく同じです。天と地を作ってくださった神様に、お話をすればいいのです。天気がよければ、気持ちのよい天気をありがとうございますと話しかけ、美しい景色に感動したら、

神様、あなたがお造りになった自然は素敵ですねと語りかけたらいいのです。そして、食べ物を与えられていることに気付いたら、ありがとうございますとお礼を言い、守られていることを実感したら、感謝しますと素直に言えばいいのです。そしてお願いしたい事があったら、神様おねがいしますと素直に申し上げたら良いのです。

考えてみると、何のことはない、多くの日本人が行ってきたことです。ただ、日本人は誰に向かって語り、誰にお礼を言っていたかはっきりしなかっただけなのです。それを、はっきりと、天地をお造りになった神様と、お名前を呼んで語りかければよいのです。キリストが教えられたように、「天の父なる神様」という呼び名を呼ぶのもいいでしょう。そしてその神様の善良さ、正しさ、愛の大きさ、恵みの深さに信頼して生きるのです。信じるというのは、そのように祈りながら生きることです。

４．　神の戒めに従って生きることを教える　　信じるということは信頼することです。神の戒めは、色々な意味で、一般世界の教えとはまったく違います。生き馬の目を抜くようなこの世界で、敵を愛し、迫害する者のために祈れと戒められています。右の頬を打たれたら他の頬をも向けなさいと教えられています。何事につけても、そのような生き方をしなさいということです。これではまったく割りに合いません。生きていけません。ところが信じるというのは、そのような生き方をすることです。神様がしなさいとおっしゃるのですから、神様に信頼してそのように生きるのです。それが信頼です。信頼すれば出来ることです。

もちろん、これは信頼、信仰の問題です。神様、助けてください。神様の戒めのように生きたいのですと、祈りながら無理と思えることをやってみることです。すると、神様は助けてくださるのです。神様の助けを体験できていない多くの人は、神様の教えをはじめから無理だと言って実行しようとしていないのです。あるいは神様に祈らずに、つまり神様に信頼しないで、自分の力で神様の戒めを守ろうとしているのです。神様を信じるとは、神様の助けを信頼して、祈りながら不可能と思われる神の戒めを、実行に移してみることです。すると、神様の助けを体験することが出来るのです。

一度、二度、三度と失敗するかもしれません。でも、遅かれ早かれ必ず感動の体験をするのです。自分でも想像できなかった、神様の教えに従った生き方ができるようになっているのに、気付くからです。そのような感動の体験を幾度かくり返して行くと、信仰がますます強くなり、信頼が固まります。神の導きと助けのみ手を感じ、神に受け入れられていることを実感できるのです。

結び

大切なことは、友人や家族や知人を礼拝会や伝道会に連れてくることではありません。子どもたちを子どもの集会に連れてくることでもありません。連れてくる前に、彼らを神様に信頼する人間、神様を信じる人間にすることです。礼拝会は神様を信じるものが、神を礼拝に来る場です。まず、信徒が本当の意味で、伝道者になることです。信徒がすくわれたのは、その人を通してもっと多く

の人々が救われるためなのです。